

「南坊殿のお加減はいかがかな・・・？」  
清重が聞いた。

安珍は、奥州白河天栄村の霊山、羽黒山の修験者である。  
南坊とは、安珍の師にあたる僧の事だ。

十五の歳より、安珍は、南坊僧の従者として、毎年、熊野を訪れ・・・清重の屋敷に泊まっている。

・・・始め来たころの安珍は・・・線の細い・・・そのくせ、眼だけが、異様に大きい・・・痩せぎすの少年であったが・・・  
それが今・・・清重の前にいる安珍は、理知的な頬笑みを浮かべた筋骨たくましい青年になっている。

南坊殿も頼りにしているのであろう・・・。

今日、安珍は・・・南坊僧の名代として一人で真砂の地に訪れている。

昨年、南坊僧は、身体を壊し・・・そのため・・・それを案じた安珍も、この真砂の地に訪れる事が出来なかった。

清重は、心配して手紙を奥州に送ったものだった。

「はい。まだ、以前のように、歩けません、息災にしております。師匠から清重様にお礼にと申して、これを預かってきました。」

言いながら、安珍は、脇においた包みを解いた。

海獺（ラッコ）の毛皮で出来た半纏が出て来る。

清重は、少し、驚いたように眼を見開いた。

もちろん、この時代、海獺の毛皮など、都であっても、見る事さえ稀だ。

「いただいた御手紙に、冬場に関節の節々が痛むようになったと書かれてありましたので・・・、師匠が・・・ならば、これが暖かかろうと・・・。」

「これは逆に心配をおかけしてしまいましたな。・・・こんな貴重なものを・・・。かたじけない。」  
清重は、頭を下げ受け取る。

安珍は、ただの旅の僧ではない。

安珍は・・・奥州の白河の国司、藤原の元勝と安倍氏の娘、小春との間に生まれた。

安珍と清重は、血はつながっていないが・・・清重が藤原の姓をいただいているために・・・名目上・・・姻戚関係にある。